

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

源氏物語

二

池田龜鑑校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

源氏物語

二

池田龜鑑校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「源氏物語」二 池田龜鑑校註

昭和二十四年二月二十五日初版發行

昭和四十三年五月三十日第十六版發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九
州市小倉區砂津・名古屋市中區榮

定價 四八〇圓

池田龜鑑（いけだきかん）

明治二十九年鳥取縣生。昭和三十
一年歿。東京大學國文學科卒業。
東京大學教授。主著—宮廷女流日
記文學、古典の批判的處置に關す
る研究、源氏物語大成等。

目 次

凡 系 本 葵

例 圖

三

文

七

葵

五

一、桐壺帝讓位後の女性達	五
二、前坊の姫君齋宮となる、院源氏に訓誡	六
三、六條御息所の心情	六
四、朝顏の姫君の意中	七
五、葵上の懷姫	七
六、新齋院御禊の儀	八
七、葵上物見に出でむとす	八
八、葵上の車六條御息所の車と争ふ	九

九、御息所の車はづかしめらる

三

一〇、御息所嘆息して歌をよむ

一〇

一一、群衆源氏禮讚

一一

一二、式部卿宮と朝顏との源氏觀

一二

一三、源氏御息所に同情す

一三

一四、紫上を物見に誘ふ、和歌の唱和

一四

一五、源典侍と和歌の贈答

一五

一六、六條御息所の心境

一六

一七、葵上病む、生靈の爲との噂	云	三四、源氏故人を憶うて歌を詠む	云
一八、葵上への御息所の憎惡	云	三五、故人のために讀經す	云
一九、源氏御息所の假住ひを訪ぶ	云	三六、大宮の傷心	四〇
二〇、源氏歸りて御息所に消息	云	三七、源氏の心境、紫上を思ふ	四〇
二一、葵上物怪に苦しむ	元	三八、六條御息所と消息を交はす	四一
二二、御息所病む	云	三九、御息所懊惱す	四二
二三、葵上物怪に苦しむ、源氏對面	三	四〇、三位中將源氏を慰む	云
二四、物怪調伏をゆるめよと愁訴	三	四一、源氏、三位中將等と故人を憶ふ	云
二五、葵上男子を生む	云	四二、源氏朝顔の宮と消息を交はす	奥
二六、御息所葵上出産の事を聞く	云	四三、葵上の侍女等別れを惜しむ	七
二七、源氏と左大臣の心境	云	四四、源氏桐壺院に參らむとす	兜
二八、源氏參内せむとす	云	四五、左大臣、院への奏上を依頼す	吾
二九、源氏懇ろに葵上を見舞ふ	云	四六、左大臣、源氏を見送る	吾
三〇、源氏參内、葵上との訣別	云	四七、源氏出でし後の寂寥	吾
三一、葵上急變、つひに逝去す	七	四八、源氏院に參り、また藤壺を訪ぶ	吾
三二、源氏と左大臣の悲嘆	云	四九、源氏二條院に歸る	吾
三三、葵上の葬送	云	五〇、源氏紫上の成人せるに満足す	吾

五一、源氏無聊、夕霧に消息す……	五
五一、源氏紫上と結婚……	五
五三、終日、紫上の機嫌をとる……	五
五四、新婚三日の餅を惟光に命ず……	五
五五、惟光の女祝の餅を紫上に上る……	五
五六、少納言の乳母事情を知る……	五

賢木

一、六條御息所伊勢に下らむと決意……	壹
二、桐壺院御惱、源氏野の宮を訪はむとす……	壹
三、源氏野の宮に御息所を訪ふ……	壹
四、御息所と和歌の贈答……	壹
五、源氏往事を回想、感慨に堪へず……	六
六、和歌を唱和、野の宮を出づ……	六
七、御息所母子の感懷……	充
八、源氏齋宮と消息を交はす……	七
九、御息所齋宮と共に參内……	七

一〇、齋宮母子伊勢に下向す……	廿二
一一、限の御惱み重く、帝の行幸……	廿三
一二、春宮參院、父院に訣別……	廿四
一三、桐壺院崩御……	廿五
一四、諒闇中の源氏の動靜……	廿五
一五、四十九日後の院の寂寥……	廿六
一六、藤壺三條の宮に退出す……	廿六
一七、源氏邸寂寥をきはむ……	廿七
一八、臘月夜尚侍となる……	廿七

一九、左大臣の心境	六
二〇、紫上の幸福	九
二一、朝顏賀茂の齋院となる	九
二二、帝の性格、外戒の專横	八
二三、源氏しのびて尙侍にあふ	八
二四、翌朝歸らむとして藤少將に發見さる	八
二五、藤壺の心境	八
二六、源氏強ひて藤壺に逢ふ、藤壺惱む	八
二七、藤壺の懊惱、源氏よりのがる	八
二八、源氏に對する藤壺の心情	八
二九、源氏藤壺と和歌を唱和して出づ	八
三〇、源氏藤壺その後の心境	八
三一、藤壺春宮を愛惜す	八
三二、源氏雲林院に律師を訪ぶ	六
三三、源氏紫上に消息す	九
三四、朝顏齋院と消息を交はす	九
三五、源氏あつく供養して歸京	九
三六、藤壺に紅葉をおくり、消息す	九
三七、參内して朱雀院と語る	九
三八、源氏退出、頭の辯源氏を諷す	九
三九、源氏藤壺と和歌を唱和	九
四〇、朧月夜尙侍源氏と消息を交す	九
四一、桐壺帝一周忌	九
四二、中宮御願の御八講	九
四三、藤壺出家を決意、受戒す	九
四四、桐壺帝の諸皇子藤壺を訪ぶ	一〇
四五、源氏藤壺を訪ぶ	一〇
四六、源氏藤壺と和歌を唱和して退出	一〇
四七、年末の源氏の心境	一〇
四八、源氏入道宮邸に参る	一〇
四九、中宮御所の寂寥	一〇
五一、藤壺・源氏失意の口を送る	一〇
五二、三位中將源氏に接近	一〇

五三、源氏、三位中將と韻塞の競技…………… 一〇六
五四、三位中將の負わざ、主客歡を盡す…………… 一〇七
五五、源氏麗月夜尚侍に通ふ…………… 一〇九

花散里…………… 一〇八

一、五月雨の頃、源氏花散里を訪ふ…………… 一二五
二、中川なる家にて和歌をよみ入る…………… 一二六
三、女主人返歌す…………… 一二七

須磨…………… 一二八

一、源氏、須磨に引退せんと思ふ…………… 一二九
二、源氏、紫上をかなしむ…………… 一三〇
三、源氏親しき人に訣別して離京…………… 一三一
四、出發前左大臣邸訪問…………… 一三二
五、致仕大臣源氏と語る…………… 一三三
六、源氏、大臣らと語りて泊る…………… 一三四
七、春の曙に中納言と別れを惜しむ…………… 一三五
八、源氏大宮の消息に返しして出づ…………… 一三六

五六、右大臣尚侍の寝所を見舞ふ…………… 一二〇
五七、右大臣源氏を發見す…………… 一二一
五八、弘徽殿に報告、善後策を講ず…………… 一二二

五六、右大臣尚侍の寝所を見舞ふ…………… 一二〇

四、源氏、麗景殿女御を訪ふ…………… 一二七
五、女御と和歌の贈答…………… 一二八
六、花散里を訪ふ、その人柄を評す…………… 一二九

九、二條院の寂寥…………… 一二七

一〇、西の對に紫上を訪ふ…………… 一二九

一一、源氏鏡に向ひ紫上と唱和す…………… 一二〇

一二、源氏麗景殿女御を訪ふ…………… 一二一

一三、花散里と唱和して夜深く出づ…………… 一二二

一四、二條院に歸り、邸内の始末をなす…………… 一二三

一五、麗月夜に忍びて消息す…………… 一二四

一六、山陵を拜せんとて入道の宮を訪ふ…………… 一二五

一七、月を待ちて山陵に詣づ	一四	三三、源氏繪をかきて無聊を慰む	一九
一八、終夜陵前に額づき故院に訴ふ	一五	三四、源氏、從者と和歌を詠む	一九
一九、源氏春宮に消息し、王命婦と和歌の贈答をなす	一六	三五、八月十五日、去年の御遊びを回想	一五
二〇、天下の人源氏の失脚を惜む	一七	三六、大貳上京の途次、源氏を訪ふ	一五
二一、下弦の月のぼる、紫上と訣別	一八	三七、弘徽殿大后に憚り、消息絶ゆ	一五
二二、源氏かの浦に着く	一九	三八、紫上の生活	一四
二三、源氏の住むべき館	一四	三九、源氏の須磨の生活	一四
二四、五月雨の頃京に使を立つ	一四	四〇、源氏京を思ひつつ冬の日を暮らす	一五
二五、紫上源氏をしのびて歎く	一四	四一、明石入道源氏の噂をきく	一五
二六、藤壺源氏を思うて返歌	一四	四二、入道、桐壺更衣との血縁を説明	一五
二七、臘月夜尚侍の返事	一四	四三、明石入道の娘の志操	一五
二八、紫上よりの返事	一四	四四、須磨に春めぐり来る	一五
二九、伊勢御息所よりの消息	一四	四五、宰相中將京より見舞に來る	一五
三〇、花散里よりの返事	一四	四六、源氏・宰相中將和歌を唱和	一五
三一、臘月夜尚侍參内を許さる	一四	四七、上巳の日開運の祓へをなす	一五
三二、須磨に心づくしの秋きたる	一四	四八、突如暴風雨となり、祓へを中止	一五
		四九、曉方海龍王の使を夢む	一五

- 一、風雨止まず、紫上より消息……………一五五
 二、暴風雨止まず、館に落雷……………一五五
 三、雨やみて月出づ、海士多く見舞ひにつ
どふ……………一五六

- 一、朱雀院故院の亡靈になやむ……………一五六
 二、源氏に對する入道一家の心情……………一五六
 三、八月十三夜源氏明石上を訪ぶ……………一五六
 四、源氏明石上に後朝の文を遣す……………一五六
 五、源氏紫上を思ひ消息す……………一五六
 六、源氏召還の宣旨、明石上懷姫……………一五六
 七、源氏入道よろこびて源氏をもてなす……………一五六
 八、源氏京に消息す……………一五六

- 九、源氏明石上と琴を彈く……………一五六
 一〇、源氏歸京す、權大納言となる……………一五六
 一一、源氏參内、帝を拜す……………一五六
 一二、源氏明石上を慰む、五節と贈答……………一五六

- 一、故院のために御八講行はる……………一五五
 二、朱雀院尙侍を愛しかつ怨む……………一五五
 三、源氏明石上に消息す……………一五六

三、冷泉院即位、源氏内大臣に昇進	一〇六
四、明石上女子を生む	一〇八
五、明石姫のために乳母を遣す	一一〇
六、乳母京を出發、明石に着く	一一一
七、入道父子源氏の好意に感謝	一一三
八、源氏明石上の事を紫上に語る	一一三
九、明石姫五十日に使者を立つ	一二四
一〇、明石上源氏に謝す	一二五
一一、源氏花散里を訪ぶ	一二七
一二、五節、尚侍らとの關係	二二六
一三、その後の人人の動靜	二二九
一四、弘徽殿女御入内	二三〇
蓬生	二三六
一、源氏流寓中の女性たち	二三七
二、末摘花の窮乏生活	二三七
三、常陸宮邸の荒廢	二三七
四、末摘花の性格と日常生活	二四〇
五、末摘花の叔母復を企つ	二四一
六、叔母下向をするむ	二四三
一五、源氏住吉詣で	三一〇
一六、源氏往事を回想、惟光と唱在す	三一三
一七、源氏明石上と和歌の贈答	三一三
一八、翌日明石上住吉に詣び	三一五
一九、六條御息所歸京、ついで病む	三一五
二〇、源氏御息所を見舞ひ、後事を頼まる	三一六
二一、御息所逝去、源氏齋宮を慰む	三一九
二二、源氏齋宮に消息す	三二〇
二三、齋宮のその後の生活	三二三
二四、源氏藤壺と議りて齋宮を入内せしめん とす	三二三
二五、藤壺、齋宮の入内をよろこぶ	三二五

- 七、兄の禪師訪うて源氏の噂をなす……………二四
 八、叔母また來りて下向をすすむ……………二五
 九、侍従末摘花と別る……………二六
 一〇、常陸宮邸の冬のわびしさ……………二七
 一一、源氏末摘花の邸前を通る……………二八

- 一二、惟光先づ入りて様子を探る……………二九
 一三、源氏露を拂ひつつ邸内に入る……………三〇
 一四、源氏末摘花を慰む、和歌唱和……………三一
 一五、源氏末摘花の生活を援ぐ……………三二
 一六、二年後一條院の東院に移る……………三三

屋

- 一、空蟬夫に伴はれて歸京す……………二九
 二、源氏石山詣で、常陸介の一行にあふ……………三〇

合

- 一、前齋宮入内、朱雀院の贈物……………三一
 二、源氏參内、故御息所を想ふ……………三二
 三、冷泉帝弘徽殿女御に親しむ……………三三
 四、理想的なる冷泉帝の後宮……………三四
 五、帝繪を好む、後宮また競ふ……………三五
 六、後宮をあげて繪の事に熱中す……………三六
 七、繪合、竹取と空穂とを合はす……………三七

- 八、伊勢に正三位を合はす……………三八
 九、朱雀院、繪卷を梅壺女御に贈る……………三九
 一〇、繪合、源氏の日記繪出で左勝つ……………四〇

- 一一、源氏と兵部卿宮畫道論を展開……………四一
 一二、殿上にて音楽の合奏……………四二
 一三、源氏目前の榮華を反省す……………四三

繪

目次

松

風

- 一、二條院の東院落成す……………二二
二、明石入道母子のために山莊を修理、源氏に報告す……………二三

- 三、明石上上京せむとて別離を悲しむ……………二五
四、入道父子の訣別……………二六
五、明石上母子舟出して京に向ふ……………二九

- 六、母子大堰に著き故郷を思ふ……………二五
七、源氏紫上に辯解……………二五
八、源氏明石上を大堰に訪ふ……………二一

薄

雲

- 一、明石姫を紫上の養女にせむとす……………二三
二、明石上その判断に迷ふ……………二四
三、尼君、明石上に助言……………二四
四、明石上決心す……………二五
五、乳母明石上を慰む……………二六

- 一、明石姫を紫上の養女にせむとす……………二三
二、冬の日、和歌唱和……………二六
三、源氏姫を迎へに来る……………二七
四、明石上母子の別れ、和歌の唱和……………二八
五、幼き明石姫母を戀ふ……………二九
六、冬の日、和歌唱和……………二六
七、源氏姫を迎へに来る……………二七
八、明石上母子の別れ、和歌の唱和……………二八
九、幼き明石姫母を戀ふ……………二九
一〇、紫上姫を得て満足に思ふ……………二九

一一、明石姫袴着	三一〇	二五、夜居僧祕密を奏す	三九
一二、明石上姫の侍女に贈物す	三一〇	二六、式部卿宮薨去、源氏參内	三三
一三、花散里と源氏との間柄	三一	二七、帝讓位をほのめかす、源氏諫む	三三
三四、源氏紫上と唱和して出づ	三三	二八、源氏帝の態度に不審を抱く	三四
一五、紫上の母性愛、源氏をゆるす	三三	二九、帝、内外の先例を探る	三四
一六、源氏明石上の美を確認	三三	三〇、帝讓位の意を傳ふ、源氏恐懼	三五
一七、明石上その境遇に満足	三三	三一、源氏、王命婦に事情をきく	三六
一八、太政大臣薨去、源氏ねんごろに訪ふ	三四	三二、齋宮女御一條院に退出す	三六
一九、天變地異頻りて、諸道勘へ申す	三五	三三、源氏、女御に懸想すれど反省す	三六
二〇、藤壺病む、帝行幸す	三五	三四、春秋の定めに女御の意見	三九
二一、藤壺、帝の御事を思ふ	三六	三五、源氏きびしく自己を反省す	三三
二二、源氏藤壺を見舞ふ、崩御	三七	三六、源氏紫上と將來を語らふ	三二
二三、諸人藤壺の崩御を惜しむ	三八	三七、源氏大堰の山莊に明石上を訪ふ	三一
三四、源氏傷心、念誦堂にこもる	三九		

源

氏

物

語

二

池

田

龜

鑑

凡例

一、解説においては、この物語の基本的な諸問題につき、諸項目を擧げ、先學による通説的なものを重んじて、極力著者自身の見解や研究傾向に偏ることのないやうに留意した。

一、解説中、諸本・研究書・後代文學への影響等の項目は、各項目自身が優に數冊の單行本となるほどの龐大な敍述を必要とするが、ここでは特に代表的と思はれる少數のものしか擧げる事が出來なかつた。

一、解説の後に、五十四帖の梗概を附け、まだ源氏物語を通讀しない人々の参考に供した。

一、本文については、校異源氏物語の底本となつてゐる大島雅太郎氏藏の青表紙本により、他の同系統の諸本の本文を参考し、大島氏本自身の誤脱を訂正する事によつて、定家所持本の再建に努めた。

一、河内本は註釋的意圖による校訂本文で、文意は通じ易いが混成した本文であるから、底本には比較的純粹な一系統線上にある青表紙本を採用し、専らこの系統線の内部を清掃しつゝ溯上することに依つて、作者自身の原本に近づかうと努力した。

一、右青表紙本の再建に當つて、定家本自身に犯された誤謬と思惟すべきものは、河内本・別本等の諸本